



## 異質性と均質性の間で：「地域」再考ノート

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-01-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 珠己 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006134">https://doi.org/10.24729/00006134</a>

# 異質性と均質性の間で

## ——「地域」再考ノート——

福田 珠 己

### はじめに

「地域」とは自明で価値中立的なものだったのであるか。現代日本社会において、「地域」というタームがきわめて頻繁に使用されている状況を見ると、そのような疑問を投げかけずにはいられない。社会において了解されているかのように見える「地域」とはいかなるものなのであるか。

この問いに接近するため、本稿では、現代社会における「地域」をめぐる現象や言説、すなわち、1980年代以降、日本各地で展開されてきた「地域」あるいは「ふるさと」を志向する様々な動きについて注目していく。このことは、すぐさま、地域の理論化に結びつくものではない。そのような地域の理論化という視角から、一方では、地域を抽出可能な分析概念として、理論の精緻化を図ることができよう。また、他方では、地域を実態として捉え、その様相を詳述すること、さらに応用的側面から地域政策にアプローチしていくこともできる。いずれも、これまで地理学において蓄積されてきた多くの研究に先例を見出すことが可能である。

しかしながら、ここでは、むしろ、地域とは何かという問題構成をとることを避けていきたい。その代わりに、現代社会において「地域」をめぐる現象について言及される際に、いかなるまなざしがそれに向けられるかということに焦点をあてていく。文化にせよ伝統にせよ、本質主義的な理解がいったん括弧に入れられる今日、このような視点は、「地域」なるものの理解に新たな地平を切り開くものであろう<sup>1)</sup>。本稿では、「地域」へのオルタナティブなアプローチを模索していく。

### 1 「地域」という神話

このフレーズは、社会学者西澤晃彦<sup>2)</sup>の論文タイトルから引き写した表現である。「地域」という神話」という刺激的な表題のもと、西澤は、都市社会学において暗黙のうちに了解されている「均質な人口の神話」という仮説について批判的に検証した。ここでいう地域とは具体的にはコミュニティ、とりわけ、現代都市社会におけるコミュニティを意味している。戦後、人口の流動化は地域社会、とりわけ都市社会の構造を一変させ、新たなコミュニティ論・地域論が展開されたが、ここでは、現場主義を装いつつ、多様な人間社会のあり方をリアリティとして認識するのではなく、「地域」なり「住民」についての仮説が地域再編を論じる枠組みとして流通してきたというのである。西澤の論考は社会学者の研究スタンスを再検討する短いものであるが、現代社会における実践・運動とも深くかかわる重要な指摘である。

「地域」神話の検証は、町内会研究における「地域」の扱いから始まる。戦後、近代化論者がゲマインシップ的な地縁集団である町内会を除去すべき遺制であると位置づけたのに対して、町内会研究に携わった研究者たちは、一定の留保をつけた上で、町内会を日本的な文化様式だと主張した。日本的なるものを前提とした社会集団、あるいは文化の考え方をそれらの研究に見出すことができ

るのである。ここで注意したいのは、町内会そのものをめぐる議論の是非ではなく、むしろ、「地域」としての町内会を「文化」という視点から論じたということ、そして、「文化」を近代化とは無縁の所与のものとして捉えていることである。いいかえると、町内会と近代化されたシステムとを比べたとき、町内会という「地域」を支える原理を「文化」の異質性に求めているともいえよう。

西澤が次に議論の俎上にあげるのは、町内会研究とは一線を隠したように見えるコミュニティ論である。従来の共同体的「地域」の解体を見据え、社会の再統合をコミュニティに見出していこうという倉沢進、鈴木広、奥野道大らのコミュニティ論は、確かに、成立や原理を問う町内会研究とは異なった視点からなされたものである。しかしながら、西澤が指摘するように、町内会を文化の型に依拠して論じてきたような「地域」の捉え方、すなわち、画一的な「地域」の把握とは異なるものの、これらコミュニティ論も行き着くところは「地域」である。日本人を市民に、文化の型をコミュニティ意識に置換し、新たな「地域」像を提示しようと、多様性を認めつつ「地域」の持つ統合力を重視しようと、「地域」という神話を共有していることにかわりないのである。

「地域」神話とはどのようなものなのであろうか。西澤は、「地域」にまつわる仮説性・虚構性を端的に指摘している。居住世界のみを「地域」として抜き出し、住民がそこに自己同一化することを仮定していること、外部との相互関連を軽視し「地域」の自律性に固執していること、さらに、異質なものへの認識を覆い隠し均質な内部を設定していること、これらは文化の型として論じられた町内会研究にしても、コミュニティ論にしても兼ね備えた特徴だというのである。たとえば、地域をめぐる近年の動きの一つとしてあげられるエコミュージアムについて考えてみよう<sup>3)</sup>。活動の主体として住民が位置づけられていること、さらに、活動に際してテリトリーが設定されることを考えると、人間集団、空間双方が固定化されているといえる。それらを所与の条件としてエコミュージアムという地域運動は成立するのである。西澤のいう「地域」神話はここにも見出せるのである。

さらに、また別の点も指摘できよう。均質な内部を設定しているが、その内部は常に外部との相違によって成立しているということである。外に対して、あるいは別のシステムに向かって異質性を主張する一方で、内部は均質なものとみなす、一見矛盾したような論理が「地域」には働いているのである。これは神話であると同時に、実効力を伴う論理でもある。

そのような「地域」の有り様を、浅野敏久<sup>4)</sup>は環境問題を論じる中で明らかにしている。中海干拓事業において、事業推進派、反対派双方が「地元」ということを何らかの形で主張しているが、その空間範囲も異なるし、また、「地元」を主張するポジションも異なるというのである。干拓事業の受益者としての市町が「地元」と位置づけられる場合もあれば、反対運動を展開していく上で中海を生活空間の中に認めうる範囲を「地元」と設定する場合もあるのだ。浅野の論に従えば、問題構成によって、本稿でいう「地域」には多様なくくり方が存在するものであり、決して、前提と認めうる普遍的なものでもないし、閉域化されるものでもない。また、均質な内部ということが虚構にすぎないのは、明白である。問題構成に即して均質な性質が設定され、それに応じて「地域」が主張されるのである。

しかしながら、神話であるからといって、現実社会に無縁であるわけではない。神話は現実深く根ざしているのである。「均質な地域」という神話が実効力を持つことは、実際に、社会のさまざまな場面で遭遇するものである。とりわけ、社会の中で異質なものを排除したり、同化を促したり

したりするときに顕著に見られる。そのような例は、テレホンクラブ等の施設が青少年にとって「有害」な環境であるとみなされそれに応じた対応がなされる過程に見ることもできるし<sup>5)</sup>、都市空間の中で老朽化した建物のみならず、野宿者など「やっかいな」人々の生活が排除される仕組みに見ることもできる<sup>6)</sup>。特定集団が、既存の領域を空間的に再編成することは、自らの政治的な権力の行使に直結しているのであり<sup>7)</sup>、その結果、「均質な地域」が実現されるのである。「地域」という神話は、常に権力と結びつき、現実社会で再生産されているのである。

## 2 ローカル／グローバル

均質性に基づく「地域」神話は、どこに向けて発せられているのだろうか。

山崎孝史<sup>8)</sup>は、私たちが日頃耳にすることの多いグローバル化には、実は、矛盾したように見える現象が付きまといっていることを指摘している。つまり、グローバル化に伴い、国家の領土・主権の絶対性や国民の均質性が揺らぎつつある一方、ナショナリズムに喚起されたような動きが見られるというのである。このような世界の観察は、領域と不可分なアイデンティティ成立の過程という点で、本稿で取り上げている「地域」周辺の動向とも重なり合うものである。なぜなら、「地域」とは、ローカルな視点のみからでは決して把握できないものだからである。

グローバル化とは、政治、経済、文化を超国家的に拡大させ、世界を均質化するだけのものではない。一方で、常に、国家下位の民族アイデンティティやローカルなアイデンティティ、あるいはナショナリズムを喚起するものなのである<sup>9)</sup>。繰り返しになるが、そこで主張されるのは、ローカルなものもつ異質性・特殊性である。そのような特殊性を前面に出した主張は、「時間—空間の圧縮という猛威<sup>10)</sup>」に対するリアクションであるといえよう。「地域」なるものが、より広い関係性の中で価値付けられ、再創造されたと説明できるのである。

しかしながら、ローカルなものが異質性を主張したからといって、そのようなものとグローバルなものが常に対抗しているわけではない。グローバルなアクターを擁護しつつ、「地域」なるものを構成していくということも考えねばならない。すなわち、国家より下位の集団(地方政府であれ非政府組織であれ)が超国家的な力と結びつくことによって、その活動を活発化させていることにも目を向ける必要があるのだ。

再び、日本におけるエコミュージアム活動に目を向けてみよう。現在でこそ、農林水産省の施策<sup>11)</sup>などを通して、国家の制度の中に組み込まれているが、1980年代にエコミュージアムが日本に紹介された当初は、外部のエコミュージアム賛同者や研究者と地域住民が関係を持ちつつ、さらには、地方自治体と協同しつつ、活動を展開していたのである<sup>12)</sup>。その際に、必ず参照されるのが、エコミュージアム発祥の地、フランスでの実践事例であり、また、創始者ジョルジュ・アンリ・リヴィエールが考えるエコミュージアムの理念であった。特に、リヴィエールの「発展的定義<sup>13)</sup>」に表明された理念は、地域住民を主体的なエコミュージアムの担い手と位置づけたダイナミックな博物館・地域おこしのあり方を示したものだとして評価されている。エコミュージアムの理念と実践については、他の論考にゆずり、ここでは、1960から1970年代のフランス社会を背景に生まれてきた思想が、日本に紹介され受容されていることに注目したい。

つまり、重要なのは、「地域」に主眼を置いた運動でありながら、その思想がグローバルなレベル

で流布し影響を与えているということである。エコミュージアムの思想を受容したのは、日本だけではない。ヨーロッパ各地に同様の展開が見られるし、北米にも実践例を見出すことができる。また、近年では、ラテンアメリカにも普及し、コミュニティのエンパワメントの中で注目されている思想でもある<sup>14)</sup>。同時に、フランスから日本を経由して他の地域へと、エコミュージアムという仕組みが地域おこしの一手法として紹介されているのである<sup>15)</sup>。

このような状況を私たちはどのように考えるべきであろうか。「地域」やコミュニティに優先権を与え、その発展を重視すること、中央集権的な体制ではなく「地域」の主体的な活動に重きをおくこと、さらに、環境も含め「地域」の生活全体に目をむけること、こういった力点の置き方が、現代社会において普遍的に評価されているという説明することもできよう。しかしながら、同時に次のような読みも可能であろう。すなわち、ローカルな運動は常にその領域内で完結するものでもなく、同時に、ローカルな関係だけから成り立っているものでもない。常に、より大きな枠組みの中で進展しているものなのである。「地域」は常により広い関係性の中で定義づけられ、生かされているのである。

### 3 「場所」の思想

「地域」神話を「場所」(place)概念と関連付けて検討することは、重要な作業である。なぜなら、均質な内部、外部との異質性を抛り所としているという点で、両者は極めて近い関係にあるからである。

ここでいう「場所」とは一般用語の場所ではない。1970年代後半以降、特別な含意で使用されるようになった地理学用語である。イーファー・トゥアンやエドワード・レルフらに代表される地理学の潮流、人文主義地理学のなかで、中心的な役割を果たしたのが「場所」概念なのである。トゥアン<sup>16)</sup>の定義にしたがえば、「場所」とは価値あると感じられているものの中心だという。「場所」を個人や共同体としての「地域」との関連の中でとらえ、それば自己および集団のアイデンティティ形成の基盤であると考えたのである。無論、このような思想は、急速に失われつつある個性の回復を切望する傾向を有していた。つまり、世界が均質化されていくという危機感から、内部の土着性や固有性を核に人間性あふれる地理学を復権させようとしたのである。

このような「場所」の思想は、その後、両極端な扱いを受けることとなる。一方では、地理学のなかで、人文主義的な「場所」理解に対して批判がなされるようになった。「場所」に根ざしていることが人間存在の根本であり、「場所」とアイデンティティとの間に本質的なつながりがあるということを前提としていること<sup>17)</sup>、さらに、個人の経験にのみ関心が注がれるあまり、「場所」の意味がもっている社会性を等閑視していることなどが、批判の対象となり、本質主義と称されることとなる。このような指摘は極めて妥当なものであろう。場所の持つ意味に注目したことから、豊かな地理学的解釈を生み出す契機にはなったに違いないが、一方で、場所と人間との調和的なつながりをあまりに理想的に、そして所与のものとして強調しすぎたのである。同時に、そういった「場所」を解釈する研究者のポジションについても問題視されることとなる。さらに、人間中心主義と叫びつつ、そこで基準とみなされているのは、常に男性であり、女性は例外的な存在、あるいは、基準からの逸脱と位置づけられていることに対しても、フェミニスト地理学者らから批判されてきた。これら

の批判から生まれてきた「場所」の理解は、当然、人文主義的な理解、すなわち本質主義的な理解とはまったく異なるものであった。「場所」は社会的に構築されたものとして捉えられるようになったのである。

他方、「場所」の思想が応用的側面で多大な影響を与えているのも事実である。人文主義地理学の思想は、その後、地理学内部で受容されるだけでなく、当時の知的潮流ともあいまって、都市計画や地域おこしに深く根を下ろすこととなる<sup>18)</sup>。実際、エドワード・レルフやジョン・ブリンカフォフ・ジャクソンの著作は地理学のみならず、建築学・都市計画の分野で参照されることも多い。例えば、ドロレス・ハイデンの『場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観—』<sup>19)</sup>はその一例である。ここでは、アメリカの事例に言及しつつ、土着の精神を帯びた「場所」を積極的に再生させていく都市計画について語られている。ハイデンは逆に、人文主義地理学以降の地理学の潮流をこう批判する。「すべての研究業績はそれぞれの学問領域の中で孤立しており、他の学問領域からは切り離された存在で終わっている。それが社会、経済、環境、あるいは文化のいずれを扱ったものであろうと、各学問領域の内側で知識がやり取りされているに過ぎない。また、学者がものにした都市空間に関する新しい知見が新機軸のプロジェクトを創造しようと腐心している専門家や地域社会の活動家に常に役立っているというわけでもない<sup>20)</sup>。」とハイデンの思考は決して特異なものではない。世界中の大小さまざまな都市計画に同様の主張をみることができる。「場所」の記憶、「場所」の力を再生させるような都市計画・景観形成は、あちこちで進行しているのである。そしてまた、このような「場所」を意識した活動が、「地域」という神話を創出し、強化しているのである。

#### 4 共感の先にあるもの

「地域」が拠り所とされるとき、人は、しばしば、それに対して客観的な位置に立つのではなく、感情的なつながりを示す。とりわけ、身近な地域や家族という社会集団を語る際には、論理より感情によるつながりが重視される。このような共感の先には、いったい何があるのだろうか。ここでは、近年の地域やコミュニティの表象として博物館展示を例に考えて見たい。

2002年、日韓国民交流年の一環として、国立民族学博物館で「2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—」が開催された。この展示は、実在する李一家の持ち物をすべてならべてアパートの部屋を再現する、という斬新なものであった。家具調度品や衣類・寝具だけでなく、冷蔵庫の中身や給料明細・子供の成績表に至るまであるべきところに展示されており、来館者は、再現された空間に、2002年を生きるソウルの李一家の生活を垣間見ることができよう。靴を脱いでアパートの部屋に上がりこんだ来館者は、留守中に住まいを覗き見しているかのような錯覚にとらわれるかもしれない。展示への誘いは、次のようなフレーズを伴う。「驚きと、共感と、知恵と文化がここにある<sup>21)</sup>。」

この展示のテーマは、韓国と家族である。ただし、韓国の「標準的な」家族像を抽出しようという意図はなかった。「これまで博物館の展示というと、社会の全体像をあらかじめ想定して、展示品はその全体像をえがきだすための素材と位置づけられてきた」が、今回は、「ソウルのアパートをなにかの表象としてではなく、それ自身の価値をもつ存在としてとらえることはできないのか？ その住人にかげがえのない個人としての意味を見出してゆくにはどうすればよいのか？<sup>22)</sup>」というよ

うな問題設定が行われていたのである。いうまでもないことであるが、博物館の展示は価値中立的なものでも絶対的なものでもない。展示という表象は極めて社会的政治的な産物であり、当然、資料や文化の所有、さらには、それらを表象する権威をめぐる交渉が行われているのである。とりわけ、近年の博物館研究ではこの種の問題に対して積極的なアプローチがなされており、現場における実践のみならず多くの論考が発表されている<sup>23)</sup>。そのような博物館をめぐる潮流の真っ只中にいる国立民族学博物館<sup>24)</sup>が、今回、これまでにない視点を私たちに提示したということもできよう。そのような文脈を踏まえて先の引用を読み直すと、次のようになる。つまり、これまでは、ある社会の「文化」という全体像を描き出すために展示資料や個人的な出来事が提示されてきたが、今回は、そういった全体像ではなく住人個人および住人にかかわるものそれ自体に光を当て、そこに意味を見出していこう、ということなのである。

「2002年ソウルスタイル」に出会ったとき、私は、すぐさま、これまで同じ博物館で行われたいくつかの展示、とりわけ、1997年に開催された「異文化へのまなざし」のことを思い出した。後者が、日頃、当然のこととして通り過ぎてしまいがちな私たちの異文化観に再検討を促した、つまり、論理的に社会の文脈の中で「異文化」について考えることを必要としたのに対して、今回の「2002年ソウルスタイル」のスタンスはまったく異なっているように感じられたのである。論理ではなく共感が、考えたり論じたりするのではなく感じるものが、ここでは優先されているのである。

このような感覚は当然のものと考えてよいのだろうか。家族だから、しかも現在を生きる具体的な家族だから、また、家族を取り巻く「場所」だから、私たちは共感と驚きをもって見ることができるのだろうか。「わたしたちは自分の生まれてくるところを自分で決めてきたわけではない。たまたま生まれてきたところが、ある土地のある家族のもとであったにすぎない。だから、文化や民族について論じるまえに、自分について知りたい、身近な人間について知りたいとのぞむ、そこから個々人の問題を組み立ててゆく以外に、未来へひらかれた異文化理解の道はないのだとおもう<sup>25)</sup>」という展示にこめられた企画者の思いは、この疑問に対して肯定的な答えを示している。エドワード・レルフ<sup>26)</sup>の言葉を借りると、代償的内側性ともいえるような感情移入的な態度を期待しており、そこから、異文化理解へと発展していくというのである。しかしながら、異文化理解を促すという点で効果あるアプローチかもしれないが、本稿で問題にしている「地域」や「家族」という社会に焦点をあてると、このような共感を前提とする態度は、かなりナイーブなものといわざるをえない。むしろ、今、考えなければならないのは、なぜ、「家族」や身近な「地域」が共感をもって眺められ語られるのか、ということである。「擬似的な世界旅行の場としての民族学博物館の役割はすでに過去のものとなり、いまや民族学博物館の収集や展示を通じて「異文化」に対して投げかける「まなざし」そのものが問われている<sup>27)</sup>」という問題構成は、「家族」や身近な「地域」を前にしたとき無効にならないはずだ。

近年の博物館界を見渡すと、家庭や生活、あるいは、身近な「地域」が取り上げられていることが多い。生活史をとりあげるもの、建物としての家やそこで展開された過去の生活の復元展示、あるいは、その周辺にある身近な環境の提示、さらに、スケールを拡大すると、エコミュージアムなど「地域」をまるごと博物館化していくような実践など、日本各地でその例を目にすることができる。しかも、そのアプローチを見渡すと、体験、体感、共感に傾倒しているかのようである。博物館経

験に光が当てられ、また、博物館のメッセージを「自分化」できる「個人的文脈」の重要性が指摘されていることを考えると<sup>28)</sup>、このような変化を博物館の積極的な戦略ということもできよう。すでに、過去の博物館像のまま生きながらえることはできないのである。いかに、個人と博物館活動を結び付けていくか、という問題を通り過ぎることはできないのである。けれども、このような博物館をめぐる状況をもってしても、先に呈した疑問、すなわち、なぜ、「家族」や身近な「地域」が共感の対象となるのか、ということ十分に説明できるものではない。むしろ、共感を持って眺められ語られる対象について、あるいは、それらに対して投げかけられたまなざしについて、ここで検討してみる必要がある。

共感の先に何があるのか。「地域」や「家族」とそれ以外とを分かち論理に注目することも可能であろう。それらは、明らかに異なる空間として位置づけられていないだろうか。身近な「地域」や「家族」にまつわる空間は、ある意味、私的空間として扱われているのである。そのような空間は、自然で、脱政治的で、また同時に感情的な、というような特性とともに語られる。それに対して、公的空間は、社会・政治的な、個人的でないものとみなされる。同時に、この空間の区分には、ジェンダーという問題も投影されてもいる。このような対比は、国立民族学博物館の二つの展示—「2002年ソウルスタイル」と「異文化へのまなざし」—がもつ視角に重なるところがないだろうか。

けれども、このような空間の二分法は極めて社会的な産物で、しかも幻影にすぎない。パトリシア・ウェスト<sup>29)</sup>は19世紀アメリカにおけるハウス・ミュージアムについて論じる中で、南北戦争以降急速に広がった「家庭生活崇拜」について指摘している。例えば、ウェストは、ジョージ・ワシントン旧宅であるマウント・ヴァーノンの保存活動について検討する中で、マウント・ヴァーノンの保存・顕彰において評価されているのは、具体的な家庭生活はなく、共和主義的な政治のレトリックの中で、象徴として描かれた家庭だということを例証している。決して、女性や子供もいる家庭生活そのものが意義付けられたわけではない。ハウス・ミュージアムで再現された家庭的な環境は、神格化された白人男性政治家を記憶するためのものであったのである。

ウェストの論考を踏まえると、「家族」や身近な「地域」といった私的空間に注がれたまなざしが、家庭的なるもの、「地域」なるものに対する男性の願望を通して象徴化されたものであるとみなすことができる。「2002年ソウルスタイル」をはじめ多くの展示では、一見リアルな家庭生活・地域生活が扱われているようであるが、それらは、決して生身の存在なのではなく、もう一方の側からのまなざしを通して想像されたものなのである。このことこそが、共感の先にあるもの考えるときに重要な点なのである。ジリアン・ローズ<sup>30)</sup>は、著書『フェミニズムと地理学』の中で、現実社会に生きる生身の女性と男性のまなざしを通して想像された「女性」を峻別して論を展開している。「地域」や「家族」が共感を鍵に表現されるという状況に対しても、同様の観点から、熟考することが求められているのである。

## 結びにかえて

ここまで、4つの視点に、「地域」なるものについて検討する糸口を求めてきた。こうした議論は、先に言及したハイデン<sup>31)</sup>の目には、学問内部にのみ向けられた戯言と移るかもしれない。しかしながら、私は、このような思考からのみ、「地域」へのオルタナティブなアプローチが生み出さ



れ、さらには、現実社会へと還元していくことになると考えている。「地域」を暗黙の前提とした状況、あるいは、「地域」に向けられたまなごしを絶対視するような状況からは、新たな行き方など生まれないのである。その意味でも、パトリシア・ウェストの言う「家庭生活崇拜」、そしてそれを「地域」に拡大した「地域生活崇拜」の正体を見破ることが肝要である。

そのことは、決して、「地域」の活動を頭ごなしに否定するものではない。むしろ、「地域」を再検討することによって、「地域」という考え方、それに基盤を置いた様々な活動が硬直化し、「地域」それ自体が前提となってしまうような事態に揺さぶりをかけていこうというのである。異質性と均質性の間を揺れ動くような思考の連続から、「地域」論の新たな地平が生まれるのである。

## 付 記

本稿は、本学部人間科学科2002年度開講科目「地域と社会の形成」における担当分の講義内容および、第3回国際批判地理学会議(2002年6月、ハンガリー・ベケシュチャバ市)での発表、女性史総合研究会例会(2002年11月、京都)での発表内容をもとに、再構成したものである。2回にわたる講義の際、自らの生活経験からコメントを寄せてくれた受講生のみなさん、また、女性史総合研究会での一連の発表のために意見を交換した科学研究グループ(基盤研究(C)「美術館博物館の展示における性別役割分業観とその社会的影響の研究」(代表 森理恵))のみなさんに、謝意を表したい。

## 注

- 1) 地域文化・地域アイデンティティと博物館、地域の歴史的景観の保全を巡って、筆者はすでに論を展開してきた。①拙稿「赤瓦は何を語るか—沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動—」『地理学評論』69-9、1996、pp.727-743、②拙稿「地域を展示する—地理学における地域博物館論の展開—」『人文地理』49-5、1997、pp.442-464。
- 2) 西澤晃彦「「地域」という神話—都市社会学者は何を見ないのか?—」『社会学評論』47-1、1996、pp.47-62。
- 3) 拙稿「空間の表現、時間の表現—エコミュージアム再考のための覚書—」『博物館史研究』10、2000、pp.1-7。なお、「生活・環境博物館」という訳語が与えられることもあるエコミュージアムとは、地域発展のために住民が主体的に活動し、地域の文化・環境の現地保存・研究・教育を行う新しい博物館思想である。
- 4) ①浅野敏久「地域環境問題における「地元」—中海干拓事業を事例として—」『環境社会学研究』5、1999、pp.166-182、②同「ローカルな環境運動への地理学的アプローチ—中海干拓問題を手掛かりとして—」『地理学評論』75-6、2002、pp.443-456。
- 5) 杉山和明「社会問題のレトリックからみた「有害」環境の構築と地理的スケール—富山県におけるテレホンクラブ等規制問題から—」『地理学評論』75-11、2002、pp.644-666。
- 6) 丹羽弘一「支配—監視の空間、排除の風景—住むこと」から「居住地」へ— 荒山正彦他『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』古今書院、1998、pp.76-87。
- 7) 前掲注5)、p.645。

- 8) 山崎孝史「グローバル化時代における国民国家とナショナリズム—英語圏の研究動向から—」『地理学評論』74-9、2001、pp.512-533。
- 9) 前掲注8)、p.519。
- 10) デヴィッド・ハーヴェイ(吉原直樹監訳)『ポストモダニティの条件』青木書店、1999、p.348。
- 11) 例えば、田園空間整備事業。<http://www.maff.go.jp/nn-home/denen-kukan/index.htm>(2002年11月6日検索)
- 12) エコミュージアムそのものが制度に組み込まれていないとはいえ、国レベルの制度と全く関係がないというべきではないかもしれない。なぜなら、こういった地域の運動の原動力となった施策・制度は「ふるさと創生1億円事業」をはじめ多数存在しているのである。このような状況をめぐる議論として、例えば以下を参照のこと。①松崎憲三「過疎地域の活性化—岡山県下の「ふるさと村」創設を中心に—」成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版、1990、pp.305-330。②安井眞奈美「「ふるさと」研究の分析視角」『日本民俗学』209、1997、pp.66-88。
- 13) 「発展的定義」について、エコミュージアムの特集号でもあるユネスコ発行の*Museum* 37-4、1985に全文が掲載されている。
- 14) 大原一興「社会文化の過程としてのエコミュージアム—現代社会における議論をめぐって—」『都市問題』92-6、2001、pp.27-38。
- 15) 台湾の例として次のようなものがあげられる。宜蘭県政府『走訪宜蘭 博物館家族』宜蘭県政府、1999。
- 16) イーファー・トゥアン(山本浩訳)『空間の経験』筑摩書房、1988。
- 17) 遠城明雄「場所」をめぐる意味と力」荒山正彦他『空間から場所へ—地理学的想像力の探求—』古今書院、1998、p.228。
- 18) この点に関しては、地理学史のなかでこれまで十分に検討されていない。学史はあくまで、学問内部で完結してしまっていたのである。しかしながら、現代社会の現状を見ると、このような関係性についても等閑視できないことは明らかである。詳細な検討は今後の課題としたい。
- 19) ドロレス・ハイデン(後藤春彦・篠田裕見・佐藤俊郎訳)『場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観—』学芸出版社、2002。
- 20) 前掲注19)、p.35。
- 21) 国立民族学博物館編『2002年ソウルスタイル—李さん一家の素顔のくらし—』国立民族学博物館、2002、表紙。
- 22) 前掲注21)、p.15。
- 23) 例をあげると、①Kaplan, F.E.S. ed. *Museums and the making of "ourselves": the role of objects in national identity*. Leicester University Press, 1994. ②Macdnald, S. and Fyfe, G. eds. *Theorizing museums : representing identity and diversity in a changing world*. Blackwell, 1996.
- 24) 異文化にかかわる民族学博物館では、とりわけ文化の所有・表象をめぐる議論が活発に行われている。同館においても、民族学という行為そのものを問い直すような展示も試みられてい

る。たとえば、「異文化へのまなざし」などはその例であろう。異文化を収集し展示・表現することの政治性を問うような内容であった。吉田憲司、ジョン・マック編『異文化へのまなざし』NHKサービスセンター、1997。

- 25) 前掲注21)、p.15。
- 26) エドワード・レルフ(高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳)『場所の現象学—没場所性を越えて—』筑摩書房、1991。
- 27) 前掲注24)、p.14。
- 28) 嘉田由紀子「地域社会での博物館利用の実践的展開の可能性—琵琶湖博物館への来館が県民にもたらす博物館イメージから何を展望できるのか—」村上皓編『施策としての博物館の実践的評価—琵琶湖博物館の経済的・文化的・社会的効果の研究—』雄山閣、2001、pp.138-146。
- 29) West, Patricia. *Domesticating history : the political origins of America's house museums.* Smithsonian Institution Press, 1999.
- 30) ジリアン・ローズ(吉田容子他訳)『フェミニズムと地理学—地理学的知の限界—』地人書房、2001。
- 31) 前掲注19)。